

こまざわ 経済 通信

発行
駒澤大学経済学部
同窓会
〒154-8525
東京都世田谷区駒沢
1-23-1

経済学部創立六十周年

記念事業について

経済学部長 百田 義治

駒澤大学経済学部は一九四九年に商経学部として開設され、本年創立六十周年を迎えました。昨年、経済学部創立六十周年を祝賀するに相応しい行事を企画・実行することを目的に「経済学部創立六十周年記念事業委員会」が設置され、準備期間も含めて委員会メンバーを中心にゼミ連を中心に学生諸君も加わった熱心な議論が積み重ねられ、学生と教職員、卒業生がともに喜び合える行事、とりわけ学生が経済学部でのキャンパスライフに喜びを感じるような行事を目標として、今年の春より様々な行事が展開されてきています。

シンポジウム・記念講演として、七月八日の経済学部主催「特別シンポジウム 規制緩和と労働・生活を考える―研究者と労働運動家が現代と未来を語る―」（労務理論学会の協力）を皮切りに、十一月十四日には経済学部創立六十周年記念シンポジウム「不思議の国ニッポンの経済・文化・社会」、十一月十五日には経済学部創立六十周年記念講演「経済学と人間の心」（講師 宇沢弘文氏、東京大学名誉教授）が、それぞれ多数の参加者を迎えて盛大に開催されました。また、十一月十六日から二十一日まで、地域と大学との連携・連帯の強化を目的として経済学部の多くの授業が地域住民にも公開講座

として開放されました。

経済学部の学生主体の企画としては、奨学論文の募集と経済学部創立六十周年を学生自身がデザインしたクラッチバックの製作が企画され、奨学論文は今まさに審査中であり、クラッチバックは十一月のオータムフェスティバル・ホームカミングデイにおける学生自身による出店での販売を含めて好評を博し、売り切れ完売のデザインも続出しています。

そして、六十周年記念事業をまとめるものとして、企画段階からの様子がDVDとして製作され販売される予定です。

このような多彩な企画が経済学部創立六十周年記念事業として展開されていますが、創立六十周年の節目は、人生に例えれば、創立六十周年の節目は六十歳で干支が一回りする「還暦」、一歳に戻ることを意味し、「華甲」とも呼ばれます。これまでも経済学部は、大学が直面する様々な困難に対して教職員が働きやすい、学生が学ぶ喜びを実感できる大学作りを目指して大学において大きなリーダーシップを発揮し大きな成果を獲得してきました。昨年発生した巨額な資産運用損失という現実の中で、今またその大学再生という大きな課題に対して大きな役割を担わなければならない状況にあります。その意味では六十周年記念事業はまさに「華甲」に相応しいものであるといえます。

経済学部創立六十周年記念事業の様々な企画・実施に取り組みまれてきた先生方、学生諸君のエネルギーと献身的努力に、また経済学部同窓会および大学の物心両面にわたるご支援に心よりお礼申し上げます。

シンポジウム

十一月十四日、経済学部創立六十周年記念シンポジウムが「不思議の国ニッポンの経済・文化・社会」と題して、記念講堂で開催された。これは経済学部同窓会の後援行事でもあり、卒業生も多数参加し、学生や一般参加者とともに「知の饗宴」を楽しんだ。

最初に三名のパネリストが以下のテーマで報告した。

荻上チキ（評論家、批評家）「メディアアリティは可能か」

飯田泰之（駒澤大学経済学部准教授）「政策論のレテラシー」

鈴木謙介（社会学者、関西学院大学社会学部助教）「何をどうやって決めるか―真善美のトリックマを越えて」

報告の後、司会の芹沢一也（思想家、シノドス代表）の司会で自由な議論に入り、メディアの問題点と改善策、政策レテラシーとはなにか、レテラシー・コスト低減のための教育の役割、日本社会の長期停滞は政策的失敗によるのか、社会構造変化によるのか等の論点をめぐって、新進気鋭の論者がそれぞれの切り口から縦横に論じた。

取りあげられたのはいづれも時代の重いテーマであり、会場は講義とは一味ちがうアカデミックな雰囲気を満たされた。また、パネリストの目まぐるしいプレゼンテーション、知的営為の分業と協業、アカデミズムとメディアの世界を自由に往来する行動、なども若い世代の「知」のあり方の一部であり、老化した頭脳が活性化される刺激的なシンポジウムであった。

記念講演

十一月十五日、経済学部創立六十周年記念講演が深沢キャンパス二〇〇周年記念アカデミーホールで開催された。講演者には、経済学界の世界的重鎮であり、二〇〇九年に地球環境問題

解決への貢献に対して「ブループラネット賞」を受賞された宇沢弘文氏（東京大学名誉教授）をお招きし、「経済学と人間の心」という演題で非常に貴重な講演をいただいた。シンポジウムと同じく経済学部同窓会の後援行事でもあり、卒業生、現役学生、一般参加者など合わせて約一五〇名の参加があった。



今回の演題は、宇沢氏の数多い著書の一つである『経済学と人間の心』（東洋経済新報社、二〇〇三年）に共感した六十周年記念事業委員会メンバーの希望でお願いし実現したものである。講演では、社会的共通資本である自然環境を経済学はどのように捉えてきたのか、一九二九年恐慌および第二次世界大戦後のアメリカ政治・経済の動きとそれが日本に及ぼした影響、海外の社会保障制度創設の背景、排出権取引と炭素税に関する見解などを通じて、「人間の心を大切に『経済学』が雄弁に語られた。そこには宇沢氏の壮大な世界観が存在し、三時間にもわたる長時間の講演となったにも関わらず一度も着席することなくお話をされたその迫力に全ての参加者が魅了された。市場原理主義の脆さが露呈した現在、宇沢氏のお話は目の覚めるほど快活なものであり、経済学部創立六十周年にふさわしい講演となったといえよう。

思い出すまきこ

駒澤大学名誉教授 飯岡透



「光陰矢の如し」というが二〇〇二（平成十四）年に定年退職して以来、はや八年を迎えようとしている。

私が本学に就任した一九六六（昭和四十一年）当時は、まだ田園都市線は開通しておらず、玉川通りには路面電車（玉電）がのんびりと走っていた。また、当時のキャンパスは、正面に大学本部や講師室があった本館、その脇に教場棟、図書館（現在の耕雲館）、体育館などが点在する極めてこじんまりした大学であった。

しかし、一九六四（昭和三十九）年頃から受験者が急増しこれまでに比べ一段と優秀な学生が入学するようになり、担当するゼミの授業やコンパ、課外ゼミの合宿なども活発に行なわれるようになり、その当時の情景が楽しい思い出としていまでも私の脳裏に深く刻まれている。

その反面、急増した入学者に対処するための教場の拡充や教員の増員は遅々として進まず、教育環境は極めて劣悪であった。例えば、教場には学生があふれ、それに対処するため急遽つくられたプレハブ教場で汗をかきながら授業したことが思い出される。そして、教員の担当授

業時間も多く、私も週あたり十コマを超える授業を担当したこともあった。また、研究室も就任当初は、体育館一階の四人部屋であり、その後七号館五階の二人部屋に移り、個室になったのは、第一研究館が竣工した一九七七（昭和五十二年）年のことである。

こうした劣悪な教育環境を改善すべく一九六七（昭和四十二年）年に八号館が新築されたのを皮切りに大学会館、九号館、禅研究館及び第一研究館などが順次増設されてキャンパスの情景は一変した。そして開校百周年の記念事業として本館や講堂が建設されて、ほぼ現在のキャンパスとなった。本学に就任した私は、当初「簿記論」と「教職科目」を担当したと記憶しているが、その後「会計監査論」「会計学総論」及び「ゼミ」などを担当した。

ところで、三十六年間の在職中で一番思い出深いことは、いわゆる「大学紛争」である。六十年の安保闘争を契機に各地の大学で学生運動が活発となり、六十年代後半には学園封鎖、校舎占拠などが頻発するようになり、わが駒澤大学でもビラを配布して退学処分を受けた学生の処分の白紙撤回を求めて一部学生による無届の学生集会や教場占拠が行なわれ、さらにバリケードが構築されるなどの過激な行動がみられたため授業が不可能になり、遂に臨時休講せざるをえなくなった。その後、大学当局と学生の間で話し合いが行なわれバリケードは取り除かれ、退学処分者の復学や学部別自治会の設立などが認められ流血の事態は回避された。

一方、この「大学紛争」を契機に大学も古い体質から脱皮し近代化がはかられた。なかでも印象に残るのは、大学機構の抜本的改革と寄付行為の改訂である。「大学紛争」の結果、一九六八（昭和四十三）年に刷新委員会が発足し、その答申に基づき大学機構の大幅な改革が実現

したが、とくに教員に直接関係したのは教授会の改革であった。それまでの教授会は、教授のみから構成される連合教授会が定期的開催されるだけで学部教授会はカリキュラムを審議するため、年に一、二回開かれたに過ぎず、助教や講師など若手教員が発言する機会はほとんどなかった。

一九六九（昭和四十四）年の刷新委員会の答申により連合教授会は廃止され、各学部及び短大の教授会から選出された委員からなる全学教授会が設置された。また、各学部及び短大においても専任教員の全員から構成される教授会が発足して学部長の公選制が実現し、毎月一回定例の教授会が開催されるようになり、大学機構の近代化がはかられた。

しかし、大学機構の根幹をなす法人機構の改革は刷新委員会では審議未了となり、全学教授会に引き継がれたが、審議は進まず一九七四（昭和四十九）年に結成された教職員組合の強い要求もあり、寄付行為改訂検討委員会が設置されたのは、一九八三（昭和五十八）年であり、たまたま学部長に選出された私も同年四月から委員として審議に参加することになった。

この委員会は法人機構、とりわけ理事会や評議委員会に関する事項や学長の選任方法など大学の最も根幹となる事項の改訂作業であったため、審議は難航し夏休みも返上して委員会が開催されたが、学長の選任方法については成案を得るに到らず、次期学部長に引き継がざるを得なかったことは極めて残念であった。そして、八十五（昭和六十）年に成案を得て、学長公選制が実現した。

こうして、大学も古い体質からようやく脱皮し、民主化・近代化がはかれるとともに文系総合大学として飛躍的に発展し、今日に至っている。

二十一世紀の今日、本学の長い歴史と伝統を継承し、新世紀に相応しい大学像を模索し確立するよう教職員が一体となって努力することが、同窓の皆さんの期待に答える道であろう。最後に同窓の皆さんの益々のご活躍と発展を祈願したい。

在学時代の思いで

駒澤大学名誉教授 佐藤俊明

私が駒澤大学に入学したのは昭和二十三年（一九四八年）の春でした。当時は旧制大学制度最後の年であり予科一年に入学したわけです。当時の大学制度では予科三年を経て学部三年と進むようになっていました。翌年二十四年に新制大学が発足し、駒澤大学では新しく現在の経済学部の前身である商経学部が新設されました。当時の総長は岡田宜法先生、学監は二人おられ、児玉建童先生と古坂明詮先生でした。予科一年終了者は新制大学一年に移行し、私は商経学部に入りました。商経学部の場合、予科二年修了者は学部二年に進み学部一回生となりました。

正式には商経学部商経学科であり、受講科目も経済学科と商学科とを併せた科目で、経済原論、国際経済学、経営学、銀行論、簿記、会計学、貿易論、商業英語、社会政策、農業政策、民法、商法、憲法、国際法等があり、内容的には実務に役立つような構成になっていたようです。商経学部長は森莊三郎先生で経済原論を担当され、講義は丁寧で、試験は厳しく単位は取りにくく、一度で試験に合格する人は少なかった。先生は留学された英国での生活をよく話して下さった。先生は二十代で東京大学教授になられ、私達が

教えを受けていた当時も国会の専門委員をされており、その為に休講された分は日曜日に補講された。又日曜日に有志を集めて特別講義をされ、本庄栄治郎先生の日本社会経済史を教材に使われた。吉沢文男先生は経済学と経済演習を持たれ、学生との接触を大切にされた。長谷川誠一先生は経済学史、森凱雄先生は経営学、保険論を担当し、学生の就職の世話をよくされていた。永田正臣先生はご専門は西洋経済史でしたが、国際経済学を担当された。上山義昭先生は弁護士であり、民法（総論、債権、親族法）を担当され、毎時間具体的な法律問題を与えられ、その回答を次の時間に提出し、学生間や先生と徹底的に討論しあいました。先生は学生の回答用紙を見ながら、その学生と反対の立場の弁護士として意見を述べられました。これは法学部の法律演習と同じものと思われ、後々大変役に立ちました。春山四郎先生は社会政策（農村社会政策）を教えられ、先生の試験で九十五点を頂いたのを懐かしく思い出します。長谷川忠一先生（会計学）、豊田尚先生（統計学）、藤井新一先生は参議院議員をされ、憲法を、三輪清一郎先生は商法を担当され、英国を初め外国の話をよくしてくれました。冬の寒い日に夏服を着て来られ寒がっておられました。山名寿三先生は戦後の国際裁判にも携わっておられた由、国際法を教えられました。三井武八郎先生は商業英語を持たれ、先生の書かれた本を使い、次は第六章をやるから調べるようにと言われ、授業では先生の言われることを直ぐ英語に変えさせられました。先生は戦時中「Japan Times」の記事を書かれ、当時は外交官試験に合格した人を外務研修所で又外務省で英語に自信のある商務官達に教えておられました。笠森伝繁先生の農業政策は英語で筆記させられました。当時のことを回想すると限り無く続いて出てき

ますが、最後に、後に明治大学総長になられたドイツ経営学の大家佐々木吉郎先生（経営経済学）、貿易学会の重鎮上坂西三先生（貿易論）、財政学の山口忠夫先生にも教えて頂いたことを付記して筆をおきます。

回顧と伝言

駒澤大学名誉教授 寺中良二



〔I〕(a)

駒澤大学に専任教員として赴任したのは、昭和三十六年（一九六一年）で、当初は「経営経済学」を担当していたが、あとで「経営学総論」に変わり、二〇〇一年の定年退職まで続きました。毎週の講義は、私としては研究発表の積りで全力投球して来ましたが、全力をつくしての講義は、自分の性分で、変えられるものではありませんでした。

授業の工夫としては、講義時間中に、ときどき受講生名簿により指名質問をしたり、携帯マイクを持って教壇から降りて後部着席の受講生に質問することにより、学生諸君に考える機会を与えて刺激するだけでなく、学期末試験に出題することになりましたので、毎週、真剣に聴講している人は良い成績が取れるようになりました。

さらに、退職前の数年間では、質疑の重要箇所も詳しく解説した講義レジメを用意し、OH P機器を使って丁寧な説明しました。

〔I〕(b) ゼミ本来の目的は、読書を通じての討論により、学生諸君の思考能力を向上させることにあると思う。従って、読書に際しては、そのまま記述内容を受け入れず、その記述理由を厳しく問い正していくことが求められる。

下級生ゼミにおける語学能力向上の工夫としては、朝日の重要社説を選び、その日英両記事を題材として比較しながら、内容理解や語学学習など「読解」のレベルで終わらせずに、特に重要と思われる内容部分について、発音の矯正をしながら口頭での文章再現の指導を試みました。

研究でした。在外研究のテーマとしてこの問題を選んだ理由は、当時、私はアメリカの経営学者P・ドラッカーの一連の著作を読み進めていたのですが、労働者の主体的意思決定の重要性を主張しているにもかかわらず、ユーゴスラヴィアの分権的社会主义企業労働者自主管理について全く触れていないのは片手落ちではないかと疑問を持つに至ったからである。

内容のある複雑な文には副文が一つ以上含まれていますが、副文部分は追加的な詳細説明にすぎないという発想が判れば、誰でも複雑な英文を口頭で再現していくことができるのである。

ところで、現地の言語は「セルボ・クロアチア語」（ベオグラードではセルビア語、またザグレブではクロアチア語）という特殊言語であったため、旅行など一切を放棄して、言語の習得に鋭意努力しながら、かなり密度の濃い研究活動を行いました。（「経済学論集」二〇〇一年三月刊、三四八―三四九ページ参照）

〔I〕(c) 四十年間の在職期間における在外研究の機会は二回で、初回はベオグラード大学（一九七四―一九七五年にかけての十二ヶ月間）、二回目はザグレブ大学（一九八三―一九八四年にかけての十ヶ月間）で、いずれも旧ユーゴスラヴィア社会有企業における労働者自主管理の調査

他の東欧諸国と同じく資本主義への体制転換が行われ、また民族紛争による内戦で各共和国が分離独立してしまいましたが、これらの事態によって、自主管理研究の意味がなくなったわけではない。まず、自主管理（連合労働）が実践された時期の歴史的事実の解明が必要であり、次に、当時のユーゴスラヴィア労働者全体の知的水準は自主管理が本来求める成立基盤よりかけ離れて低いものであったにすぎず、自主管理は高い倫理観の上に創造性を持った知的労働者による主体的意思決定を行う未来型経営そのものである点が指摘できるからである。

現地で大量に集取した原語文献や一次資料がまだかなりそのままになっているが、これから

も身体の許す限り読み進め分析していければと思っています。

〔II〕(a)

一九七二年頃、私が四十一才のとき、医者からガンの告知を受け声帯の切除を促されました。

当時、死を覚悟し失意のうちに身辺整理をしながら助かる方法はないものと必死に本を探しました。幸いにも森下敬一著『ガンは恐くない』という本に出会い、「お茶の水クリニク」での治療により命拾いし今日まで生きることができました。（『国際自然医学会』の月刊機関誌「自然医学」参照）

「玄米・菜食の食事療法」と「漢方薬の煎じ処方」によってガンの増殖・転移を防ぐだけでなくガン組織を消滅させるこの治療法は、日本医師会から全面的に排斥され（健康保険制度からも締め出され）ているため、全く不幸なことにガンの正しい治療法が今なお国民に知らされていないのです。

一般に知られている手術による方法、放射線による方法、抗ガン剤による方法などのガン治療では、残念ながら殆ど助かりません。

詳細は省略しますが、肉食をすればガン組織の増殖や転移は避けられません。食事内容のよしあしによる好転か悪化は一二月のタイム・スパンで決って来ますが、毎日毎日の食事には充分注意して下さい。

〔II〕(b)

最後に、皆さん方に申し伝えたいことは、人生を誠実に生きてほしいということです。また、何でもよいですから、何か努力を続けて下さればと思います。

定年退職を迎えるにあたって ―後輩へのメッセージ―

吉野 紀

経済学を専攻した皆さんの目からすれば、目下の世界を覆う不況に対し経済「学」は何をしているのかと隔靴搔痒の苛立ちを覚えるかもしれない。民主主義に言及して吐いたW、チャールズの言葉をもじれば、「資本主義は最悪の経済システムだ。ただし、人類が作り上げた全ての他のシステムを除いて」というところであろう。

人類の進歩を信ずる限り、誰も未だ眼にしたことの無い新しい経済システムは必ず誕生するであろうが、今の時点では、代わり得る最良の制度は他に無い。このシステムも人間が生み出したものである以上、欠陥を抱えることは自明であり、要は人間がどのように運用するかに懸かる。我欲を追求する機能と機会を掴んだ一部の人間と、「学」が前提とするある意味で純粹化された人達との経済行動が衝突することも、やはり自明と言える。こうした観点から、現実の日々の経済の運行をみつめ直してみようであろうか。

二〇〇九年の五月、テレビ朝日のニュース・ショー番組の制作会社から、「不景気」をテーマに取り上げるに当たり解説を欲しいと依頼され、八本の質問を受けた。その中の一つは「日本経済の好転はいつからであろうか」という問いであった。当面の回答は示したが、日本の経済を運転、操作する権限も持ち合わせていない私個人の予想には限界があり、世界全体の経済、政治環境の突発的激震に見舞われれば、期待を込めた予測など木っ端微塵に吹き飛ばされる。ただ、不景気から可能なかぎり素早く脱

出するには、どのような政策を優先すべきかという戦略については、本質の見極めがつきさえすれば私を含めそれぞれの見解を誰でも打ち出し得る。皆さんも、日頃の経験と世界の経済、政治の動向を注視する眼力を養う中から、独自の見解や戦略構想を打ち立ててみたらいかがであろうか。

高次元の神学や哲学、倫理学あるいは、天文学や物理学に比べれば、地表でうごめく人間という生き物の所作を扱う経済学は次元が低く、また複雑でもあるが、そこに一種の面白さもある。これを感得するところに経済学を専攻した我々の特権がある。ご健闘を祈る。

『こまざわ通信』 二十三号を読んで

昭和四十五年卒業 柚木 駿一

私が北海道余市高校を卒業して、駒澤大学に学んだのは昭和四十一年四月から昭和五十一年三月（学部そして大学院）までであり、すでに四十年になろうとしております。この間、何度か大学を訪れて校舎の変貌に驚いたことはありましたが、特段関心を持つことはありませんでした。ただ、所謂「資産運用問題」については唖然としました。

『こまざわ通信』で在学中身近におられた方々が大学の要職や学部長就任の記事をばんやりと読んでいた程度でした。しかし、二十三号の上坂先生の訃報と遠藤先生の思い出の記に接して、学生時代の記憶がどっと蘇ってきました。手元に当時の資料があるわけではないので記憶だけです。まさに、今ある駒澤大学の基礎を築くことに極めて大きな役割を果たされたお二人の

記事を読み、大変残念でもあり、懐かしく感動もいたしました。実に多くの記憶が蘇ってきました。

話は変わりますが、私も八年ほど子供の成長を機に中学、高校のPTA活動に深くかかわりました。特に東京都公立高等学校PTA連合会副会長、(社)全国高等学校PTA連合会理事として二年間組織運営に当たってきました。PTAは、保護者一人一人の任意参加を基本原則とした組織であり、時代とともに運営に難しさが増しております。東京都、全国各地の会議や大会出席等の多忙な一時期を過ごしましたが、大変、貴重な経験をすることが出来た機会でもありました。

さて、同じく任意団体である「駒澤大学経済学部同窓会」には、どのような役割があるのでしょうか？現実社会で、どれだけ機能しているのでしょうか？経済学部の歴史からして組織の大きさは？組織率は？活動内容は？考えるべきときではないでしょうか？知恵を出し合うべきではないでしょうか？

役員の皆様が、今も努力されていることを承知の上で、さらに、工夫の余地があるのではないかと申しあげさせて頂きたいと存じます。同窓会の一層の発展を心から願う会員からの提案として受け止めていただければ幸いです。



★鈴木伸枝ゼミ

私たちのゼミでは公共経済を学んでいます。僕たち三年生は男女八人と少人数のため、コミュニケーションがとりやすく仲が良いです。授業では毎週一人が報告担当者としてレジュメを作成して発表します。一時限すべてを発表に使えるため報告担当者はプレゼンテーションの訓練にもなっています。二年次には『ミクロ経済学戦略的アプローチ』（梶井厚志、松井彰彦著）を使いました。内容はゲーム理論を用いた分析を中心にミクロ経済分析の基礎を学ぶというものでした。今年にはゼミナール『公共経済学入門』（井堀利宏著）を使って、担当者が公共経済学の理論と現実を勉強中です。発表後に時間があるときには、SPIの問題を解いて就職活動に備えています。

また、九月下旬には温泉地でもある諏訪でゼミ合宿を行いました。メインイベントは四年生の卒業研究の中間報告です。年金問題に関する報告には、三年生からも活発な質問・意見が出ました。夕食までの自由時間には諏訪湖へ行き、アヒルボートで漕いだり湖のほとりを散歩したりしました。夕食は上品な器に上品な盛り付けをしてあり、味も見た目もおいしいものでした。夜はアヒルボートで筋肉痛になった体を温泉で癒しました。

★瀬戸岡ゼミ

当ゼミでは、十一月初旬には多数の一年生が新たに参加、さっそく毎週定期的なゼミ活動を開始、二年生とともに十数人を一組とする七つのサブゼミが結成され、それぞれテキスト二冊を学習し、成果は春の合宿で発表することになっています。

一方、四年生は、進学・就職など各ゼミ生の進路はほぼ決まっただけでなく、卒論も書き終えたため、十一月だけでも、みんなで箱根一泊旅行に出かけたり、私をつれてデイズツーランドで一日中遊びほうけたりしています。

秋は、ゼミ活動の成果を発表する季節。日本学生経済ゼミの大会では、十一月の東京インナー大会で七つのサブゼミがそれぞれ参加、研究

発表し、他大学の学生と討論し、交流してきました。十二月の全国インター大会（今年の会場は関西大学）には、二年生から四年生まで総勢一〇〇人以上（参加者数は日本最大）が大阪に乗りこみます。そのためにカンパをお寄せいただいたOB・OGには一同感謝しています。

三年生は、この一年、全員が国際金融について勉強してきました。金融危機の時代の経済の全体像をとらえることがねらいでした。それに一段落をつけた十一月は、進路にかかわる集中ゼミを、例年のように一週間にわたって学内で夕方から連夜おこないました。ゲストに他大学の先生においでいただいたほか、多数のOB・OGと四年生のご協力を得ることもできました。三年生一同、たいへん感謝しています。三年生のゼミでは、十一月現在、卒論草稿の第一次発表を逐次おこなっているところです。

二年生は、前半期にはグローバル化した世界経済の基本構造について、後半期は日本経済の基本構造について、それぞれ英文のテキストをつかって学習・討論してきました。いま（十二月）は、後輩（一年生）の指導に全力をそそいでいます。



十一月に開催されたゼミOB・OGと現役ゼミ生との交流の集いには、三十人以上の卒業生と多数の現役生が参加、楽しいひと時をすごしました。私は、五月にパリで開催された世界政治経済学会に出席し研究発表しました。現在は一橋大学でも講義を担当、駒大での仕事とあわせて休む暇もない日々を過ごしています。なお来年五月七月には、毎週土曜日、駒大の公開講座で「混迷する現代世界を読み解く」と題してお話します。ぜひおいでください。

★松本ゼミ

松本ゼミは設立三年目、昨年度は初めての卒業生が出ました。現在は二・三・四年生あわせて計四十四名の学生が在籍しています。松本ゼミは非営利組織や社会的企業について勉強しています。座学による勉強はもちろんのこと、特にフィールドワークに重きをおいて勉強に励んでいます。フィールドワークは実際にNPO団体や企業に訪問することにより、教室では学べないことを肌で感じて学ぶことができます。

訪問調査はいくつかのグループに分かれ、グループごとに研究テーマを決め、年に二回のゼミ内プレゼン大会において成果を報告します。ゼミ内プレゼン大会では、二年生から四年生までが集まり、意見交換を行います。先輩からの厳しい意見はもちろんのこと、後輩が先輩の意見を言うこともあり、全員で切磋琢磨しています。



松本ゼミの最大の特徴は、勉強とその他の部分のメリハリがしっかりしているとこです。ゼミ内プレゼン大会や訪問調査など勉強するときは全員が集中します。プレゼン資料を作っている気づいたらもう終電の時間だということがよくあります。また、勉強が終わればくだらない話をしたり打ち上げを行ったりと楽しい時間を全員で共有しています。特に合宿では、夏にはダム見学や花火を、冬にはスキー・スノーボードなどを行います。夜には懇親会もありとても楽しい時間をすごしています。このように勉強に遊びに全力投球なので、松本ゼミは大学生活をとて充実したものにするゼミだと思えます。

現代応用経済学科二年 桂大輔

★安元稔ゼミ



(一)ゼミ内容の紹介
安元ゼミナールは、歴史に興味のある諸君を対象にして、経済史的なものの考え方、方法、文献の探し方などを身につけてもらうことを目的にしています。主として、ヨーロッパについて勉強しますが、アジア、アメリカ、その他の地域も対象にしています。すぐれた経済史の文献を選んで、要約、興味を持った点、疑問点の報告を中心に授業を進めています。

今まで購読した文献は、J・R、ヒックス『経済史の理論』新保博他訳 講談社学術文庫（二〇〇七）一九九五、マルク・ブロック『歴史のための弁明―歴史家の仕事』松村剛訳 岩波書店 二〇〇四、E・L、ジョーンズ『ヨーロッパの奇跡―環境・経済・地政の比較史』安元稔・脇村孝平訳 名古屋大学出版会 二〇〇二、J・M、エリス、『長い十八世紀のイギリス都市―一六八〇―一八四〇』松塚俊三他訳、法政大学出版局、二〇〇八、A、デイグビー／C、ファイインステイン編『社会史と経済史―英国史の軌跡と新方位』松村高夫他訳 北海道大学出版会、二〇〇七、等です。

夏休み、春休みに一泊二日、あるいは二泊三日の合宿を行います。二〇〇九年度は、新型インフルエンザの感染の恐れがあり、残念ながら、急遽中止せざるをえませんでした。

(二)教員の近況報告：二〇〇九年二月に、『製鉄工業都市の誕生―ヴィクトリア朝における都市社会の勃興と地域工業化』名古屋大学出版会を出版しました。現在、英語の著作（Minoru Yasunoto, The Rise of a Victorian Ironopolis? Middlesbrough and Regional Industrialisation）を執筆中です。

(三)ゼミ生の就職状況：四年生の今年度の就職状況は、殊のほか厳しく、十月になってようやくほぼ全員内定をもらいました。就職先も例年に比べて、一ランクも二ランクも下がりました。主な就職先は、流通、コンピュータ・ソフト、福祉、不動産等です。

(四)ゼミ同窓会の開催案内：ゼミ同窓会の開催は、現在のところ予定しておりません。

ソフトボール大会記

経済学科三年

飯高

北斗

(館ゼミ)

経済学部では恒例となっているゼミ対抗ソフトボール大会が今年も大学の開校記念日である十月十五日に玉川キャンパスで行われました。昨年同様、前日が雨であったために開催が危ぶまれましたが当日は晴天に恵まれて絶好のソフトボール日和となりました。当日は、早朝より会場で練習を行うゼミやソフトボール大会にあわせてオリジナルTシャツを作っているゼミなど様々で、各ゼミのソフトボールに対する情熱やゼミの団結力をみることができました。

試合のほうは一回戦から白熱した試合が展開されとても見ごたえのある内容ではないかと思いましたが、私もゼミのメンバーと一緒に試合に参加したり、また一方では審判として大会運営の立場として携わりました。運営の立場をなかなか経験する機会がない私にとっては慣れないことも多々ありました。私は運営が滞りなく進行できるように努力しました。大会は大きなトラブルもなく予定通りに進行していったのでよかったです。

また、試合はトーナメント方式であったので各ゼミとも独特の緊張感がありました。しかし、チーム一丸となって真剣勝負している各ゼミの姿を見ることでとても心踊らされましたし私自身もとても楽しむことができました。大会も終盤になると残っているチームはいずれも強豪揃いで、特に敢闘賞杯決勝や本選の準決勝・決勝は一進一退の攻防でどの試合も目の離せない試合でした。

結果は、優勝が昨年の覇者で連覇となった瀬戸岡ゼミ、準優勝が長山ゼミ、三位が岩波ゼミと館ゼミ、敢闘賞は清水ゼミでした。今年のソフトボール大会は、昨年を超える盛り上がり

みせたのではないかと私は感じました。

最後になりましたが、当日の大会運営に協力をしていただいた各ゼミの先生方をはじめ、サポートしてくださった方々本当にありがとうございました。



★経済学部同窓会事務局からのお知らせ

一、経済学部同窓会への加入促進

同級生、ゼミやサークルの仲間、地域のお知り合いで「経済学部同窓会」に未加入の方がおられましたら、是非、加入をお勧めください。加入手続きは郵便振替用紙に、氏名、卒業年度、卒業学科、住所、電話番号を記入のうえ、同窓会費を納入することで完了します。

- ・ 会費：年二、〇〇〇円×三年分Ⅱ六、〇〇〇円（会費は三年分を一括して納入します）
- ・ 口座番号：〇〇一九〇一―一六一四八〇九

二、「こまざわ経済通信」の原稿募集

・ 加入者名・駒澤大学経済学部同窓会
『こまざわ経済通信』は経済学部と卒業生を結ぶ唯一のメディアです。紙面の充実をはかるため卒業生の原稿を募集しております。積極的なご投稿をお願い致します。

- ・ 論 題：自由
- ・ 字 数：八〇〇字以内
- ・ 送付先：〒一五四―八五三五 東京都世田谷区駒沢一―三三一 駒澤大学経済学部同窓会
- * なお、原稿の採否に関しては、編集委員会にご一任ください。

三、経済学部同窓会ホームページ

「駒澤大学経済学部」のホームページ
(<http://www.konazawa-u.ac.jp/gakubu/keizai/>)から「経済学部同窓会」のホームページに入ることが出来ます。

★経済学部創立六十周年記念DVD発売のお知らせ

二〇〇九年に創立六十周年を迎えた経済学部では、現在、記念事業の一環としてDVDを作成しています(編集：学内八ミリ同好会)。DVDの内容は、経済学部の歴史や歴代スタッフ名、学内風景、様々な学内行事(入学式・卒業式・ゼミナール連合会の活動、オートムフェスティバルなど)の紹介などです。三月に完成予定であり、一、〇〇〇円(送料込)で予約販売を行いたいと思います。購入を希望される方は、以下の内容を振込用紙の通信欄に明記の上、下記の口座にお振り込み下さい。

- 氏名、郵便番号、住所、連絡先、卒業年
- 口座番号：〇〇一九〇一―一六一四八〇九
- 振込代金：一、〇〇〇円(送料込)
- 加入者名：駒澤大学経済学部同窓会